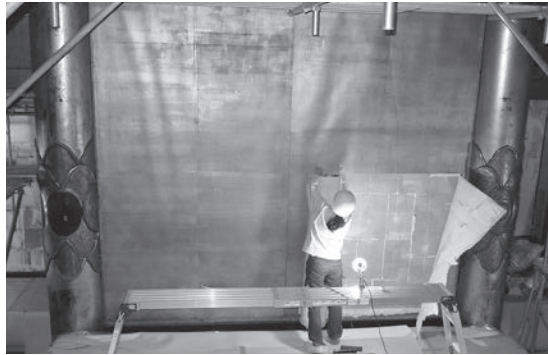


丁寧に金箔を拭き取っています

ず、古い金箔と漆を取り除いて新たな漆金箔を施すことになりました。本誌六月号で既報のとおり、阿弥陀如来立像を安置していた宮殿が解体され修復工房に持ち出されたので、現在の阿弥陀堂内陣には、壁、柱、天井に沿って全体的に足場が組まれ、古い金箔と漆を取り除いたり、各所に取り付けられた金具を取り外すなどの作業が始まっています。ところで、非常に高価な材料である金を、このたび内陣・外陣美掃工事を請け負う小堀・若林工事共同企業体の協力をえて、そぎ落とした古



宮殿のうしろにあった金障壁の金紙を剥がす作業

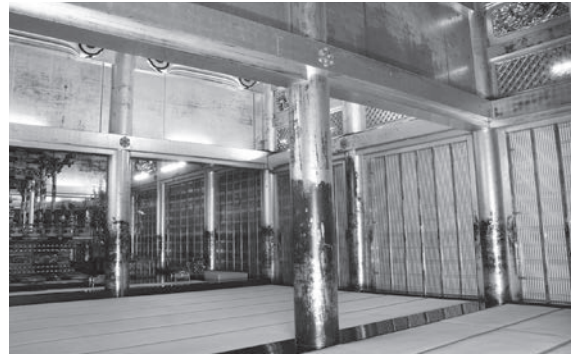
い金箔を集めて再用する取り組みが行われています。例えば、古い金箔部分を拭き取った雑巾はそのまま集めて燃やすことで、酸化しない金だけが最終的に残ります。なお、表具工事においても金紙などの多くを新調することから、古くなった金紙もあわせて回収し、燃やして金を回収しようとしています。この取り組みによって、最終的に数百グラム程度金を回収できると予想されるため、再度金箔にしたり記念品に加工したりして活用を目指します。



御修復のあゆみ 伝承された先達の願い

阿弥陀堂内陣・外陣美掃工事の進捗 金の再生を目指して！

阿弥陀堂の内陣・外陣美掃工事では、金物の美掃や漆面の美掃などとともに漆金箔が施された箇所は補修が行われますが、阿弥陀堂内陣の床面積は御影堂の約半分しかありません。しかし、御影堂での漆金箔（鍍金物を除く）の補修面積が約五六㎡であったのに対し、阿弥陀堂の漆金箔（鍍金物を除く）の補修対象となる面積は約二、二〇〇㎡で、その約四〇倍にもなります。御影堂では、柱や梁などは白木材や漆を塗ったものが使用されているのですが、阿弥陀堂では、その壁や柱、天井に何層にも漆金箔が施されているのです。親鸞聖人の教えを聴聞する道場である御影堂に対し、阿弥陀堂は『仏説無量寿経』の世界を表しているため、金箔を使用する部分の多少の違いとなって表されているのかも知れません。

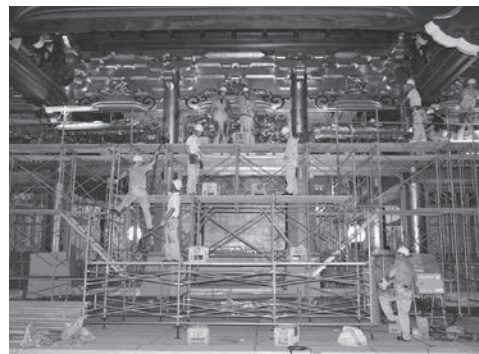


金箔が落ちている柱

漆金箔(うるしきんぱく) 漆箔(じつぱく)と、うるしはくともいわれ、薄く延ばした金箔を漆を接着剤として使って貼る技法のこと。

さて、金箔が多用された阿弥陀堂の内陣は、明治期の再建以来長い年

月を過ごす中で、漆金箔が施された柱に法衣が触れたり、壁面を羽毛掃除するなどの積み重ねにより、金箔の剥落が多く見受けられました。漆金箔はそもそも非常に長持ちする工法の一つなのですが、阿弥陀堂の漆金箔の多くは、指でなぞっただけでも簡単に金箔が落ちてしまうような状態になっていることがわかりました。近年、漆の代わりにニス塗るといふ工法が用いられることがあるのですが、この工法だと金箔が落ちやすくなるという欠点があります。このため、明治期の再建やその他の修復時においてどのような修復材料を用いていたかを調べるため、金箔の一部を剥ぎ取って成分分析を行いました。結果、ニスではなく漆が使用されていることが判明しましたが、現



阿弥陀堂内部にかけられている足場

在の状態が経年劣化によるものかどうか、今もまだはっきりとはわかっていないため、引き続き原因を調査しています。ところで、前述したように現在の阿弥陀堂の漆金箔面は劣化が進んでいるため、このたびの修復では、明治期再建時の金箔を残すことができ

真宗本廟両堂等御修復阿弥陀堂工事「瓦葺き上げ始め式」が執り行われました

2013年7月25日、「阿弥陀堂瓦葺き上げ始め式」が阿弥陀堂素屋根内にて執り行われました。

式では、宗派関係者や工事関係者など約100名の列席者が見守る中、屋根改修工事を進める阿弥陀堂屋根改修工事共同企業体の山本清一氏（伝統保存技術保持者）と設計監理団体の(株)日建設計の岡本慶一代表取締役社長が一枚目となる軒丸瓦を葺き上げ、続いて、同企業体の寺本光男氏（伝統保存技術保持者）の介添えのもと、大谷暢顯門首がその一枚目となる瓦を、「よいしょ」のかけ声が響くなか、真鍮製の釘を金槌で打ちつけ固定されました。

続いて、里雄宗務総長が「先達の志願を受け継ぎ、多くのご門徒の皆様の負託にこたえるべく、御修復工事を着実に進めてまいりたい」と挨拶しました。

なお、阿弥陀堂の瓦葺き上げにあたっては、御影堂と同様に土葺き工法から空葺き工法へと変更し、桟木に直接瓦を固定します。これにより従来は1250トンあった屋根の重さが約400トン軽減される見込みで、耐震性能の向上が期待されています。

